

伊丹教会主日礼拝説教要旨 7月21日

ローマの信徒への手紙 14章 13～23節「愛を以て之を貫く」

山本一牧師

●教会も幼稚園もまた企業であっても、基本的な理念を持つことが大切です。常に道を誤りやすい私たちがその理念に立ち返り、存在の意味と価値を確認することができるからです。

●伊丹教会創立時の牧師であった佐藤健男牧師は、日曜学校について書かれた文書の中で「欠くことができないのは子どもたちの魂への愛情である」と記しておられます。古い神学的教義を教え、覚えることを第一にするのではなく、生活の中における愛の実践こそが大切だという理念は、日曜学校に限らず、伊丹教会の交わりと宣教の根底に今もあるものだと言えるでしょう。

●今日の聖書は使徒パウロが、教会の中にある問題について述べている箇所です。当時のローマの教会には「食物規定」とらわれる人々と、自由に何でも食べるのを良しとする人々があり、裁きあい、教会の中に分裂が起こっていたようです。パウロは15節で「あなたの食べ物について兄弟が心を痛めるならば、あなたはもはや愛に従って歩んでいません」と記しています。パウロはいくら自分たちの教義や教理、正しいと思う確信を追求しても、そこに違いを持った他者への愛の配慮がないと意味がない、と述べているのです。

●同志社を設立した新島襄は「キリスト教とは何か、と問われれば『愛以貫之』と答える」と言いました。新島は明治期の日本で「富国強兵」というスローガンではなく、「神を知り、畏れ敬い、愛すること」にこそ未来の日本を支える基礎があるのだと信じ歩んだのです。

「愛を貫いて生きる」ということは難しいことですが、神様がイエス様を送り十字架にかけてまで私たちを愛してくださったことを共に思い起こすことによって私たちは日々小さな愛の働きへと押し出されていくのです。

●「増させたまえ、主を愛する愛をば」と歌う讃美歌483番は、エリザベス・ブレンティスが病の中で自らの存在価値を問う日々にあって生まれた詩でした。何も役たつ事ができないけれど、ただ神を愛し、神を賛美して生きることによって自らの価値があるのだと示され、この詩を書いたのです。神に愛されていることに感謝し、もっと神と人を愛せるようになりたいと望み、歌う、この讃美を共に味わい、私たちも「愛」を全てにおいて貫いて生きる歩みへと導かれていきたい、そう願います。